

ジェンダーによる空間の使い方に関する研究

ー タイ北部のS村、T村を事例として ー



AK11027 岡本 麻梨子

Keywords

女性 男性 2本の柱
社会的役割 空間概念

1. はじめに

1.1 研究背景

私たち人間は一般に女性と男性に分類される。ジェンダーとは生物的・身体的な性別ではなく社会的・文化的な性のありよう、社会的立場を示す。社会的立場の構築には、文化・気候・宗教などが関係しておりその土地によって異なる。例えば「男らしさ」や「女らしさ」は、その土地の文化によって後天的に形成されたものである。社会的立場が異なれば、生活の実態も異なり、空間の使い方にも違いが出てくるのではないかと考えた。

1.2 研究目的

本研究では、ある土地のジェンダー、社会的立場に着目しながら空間の様態を考察する。対象としたのはタイ北部のコン・ムアン、タイ・クーンというタイ系の社会である。タイは上座部仏教が一般的な信仰であり、戒律を遵守し、徳を積むことが良いとされる。出家は最大の徳を得る機会であり、出家し修行したものだけが自己救済できるとされる。仏教には「女には9つの悪い属性がある」、「五障三従」、「変成男子説」等女性蔑視と思われる教えが数多く存在する。実際に儀礼や行事は男性が中心となって行われ、女性は僧侶と接触することさえ禁じられている。タイの女性は活発な経済活動を行っているが、社会的地位は低いとされる。半数以上の女性が農外就業を行っていて、その収入は食費や子供の教育費、家具や生活用品の購入、住居の増改築に使われ、収入のほとんどを自分のためではなく住居や家族に貢献するためにつかっている。一方男性は収入のほとんどを自分のために使う。

男性と女性で社会的立場や社会的役割が異なれば、生活空間の使い方にも影響してくる。男性と女性の活動や活動領域に着目し、男女で居住空間の使われ方にどのような違いがあるのかを明らかにしていく。

先行研究の検討として、2011年の宮川さんの論文は空間概念と性別は関係しているという結論である。これもふまえて考察していく。

1.3 研究方法

調査期間：平成26年9月15日～9月21日（S村）

平成26年9月22日～10月1日（T村）

調査地：タイ チェンライ県 S村

タイ チェンマイ県 T村

調査方法：フィールドワークを行い、インタビューと住居の実測、集落全体の実測を行った。

(1)実測調査

住居（S村8軒、T村10軒の計18軒）の平面図（1/50）、断面図（1/50）、敷地図（1/100～200）、集落図を実測により作成した。

(2)インタビュー調査

事前に作成したインタビューシートをもとに、各住居の代表者に聞き取り調査を行った。インタビュー項目は家族構成・年齢・職業等の基本事項、生活について、1日のスケジュール、住居の間取り、住居の増改築、ジェンダーに関すること等である。

2. 調査地の概要

2.1 タイの概要

タイ王国は北緯5度36分から北緯20度28部、インドシナ半島の中央部とマレー半島の北部に位置している。北部はラオス、東部はカンボジア、西部はミャンマー、南部はマレーシアに接している。首都はバンコクで、国土面積は51万4000km²あり日本の国土面積の約1.4倍の大きさである。気候は熱帯モンスーン気候に属し、6～10月の雨季、11～2月の乾季、3～5月の暑季に分けられる。年間の平均気温は約29℃で、バンコクでは4月の平均気温が35℃、12月の平均気温が17℃である。ただし地域によって差がみられる。人口は約6000万人で、民族はタイ族が約75%、中華系が約14%、その他にマレー系、インド系、モン系、カレン系等がいる。宗教は9割以上が仏教徒で占められ、そのほとんどは上座部仏教である。

2.2 S村の概要

S村はチェンライ市街から北に約48kmの、ミャンマーとの国境近くに位置する。人口は約900人で住居は205軒ある。ほとんどの世帯が、かつてチェンマイを中心に現在の北タイを統括していたランナータイ王国民コン・ムアンである。

2.3 T村の概要

T村はチェンマイ市街から南に約30kmの、ピン川の支流であるカーン川沿いに位置する。人口は661人で住居

は200軒ある。ほとんどの世帯が、ミャンマーのシャン州セントウンから100年以上前に北部タイに越境してきたタイ・クーンである。

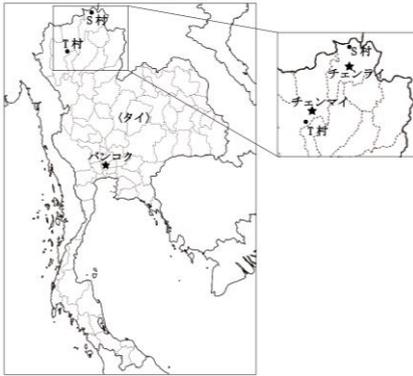


図1 S村、T村の位置

3. 住居

3.1 空間構成

北タイの伝統的な住居形式は竹や木造の高床式住居である。

3.1.1 S村の住居

S村の住居は主に階段：カンダイ (kandai)、半屋外空間：ラビアン (rabieng)、広間空間：トゥーン (tuun)、寝室：ホン・ノン (hong noong)、台所：クルア・ファイ (krua fai)、テラス：チャーン (caang) などで構成されている。階段を上がると壁で仕切られていない半屋外空間のラビアンがあり、扉を入ると広間空間のトゥーンがある。ラビアンとトゥーンの間には20~30cmほどの段差がある。寝室は壁で仕切られているプライベートな空間であり、訪問客は中に入ることにはできない。



図2 S村の住居平面図

3.1.2 T村の住居

T村の住居は主に玄関：ハック・ルム (huck lum)、広間空間：ハック・ボン (huck bom)、主寝室：ナイ・ファン・ルアン (nai heuan luang)、寝室：ナイ・ファン・ノイ (nai heuan noi)、廊下：ホーム・リン (hoom lin)、台所：ファン・ファイ (fuan fai) などで構成されている。階段を上がると扉があり、扉を入ると日本で言う玄関のようなハック・ルムがある。この階段

は必ず東から西へ上るように設置されている。ハック・ルムから20~30cmほどの段差をあがると広間空間のハック・ボンが広がる。寝室はS村と同様壁で仕切られているプライベートな空間で、日中は鍵がかかっていることが多く訪問客は中に入ることにはできない。主寝室であるナイ・ファン・ルアンは一番東側に位置し、最年長者の寝室である。寝室が2つある場合は、雨どいの下にあり廊下という意味を持つホーム・リンという廊下を挟んで西側にもう1つの寝室ナイ・ファン・ノイがある。台所は入り口から一番離れた場所に位置している場合が多い。ファン・ファイというのは、ファン=家、ファイ=火という意味である。

3.2 柱と宗教空間

3.2.1 2本の柱

調査対象住居にはS村、T村ともに住居には2本の神聖な柱が存在する。S村では主にサオ・エック (sao eek)、サオ・ナン (sao nang) と呼ばれ、T村ではサオ・パヤー (sao payaa)、サオ・ナン (sao naan) と呼ばれていた。サオ・エック/サオ・パヤーは男の柱、サオ・ナンは女の柱という意味を持つ。サオ=柱、エック=大きな・重要な、パヤー=偉大な・大きい、ナン=女性という意味である。これらの柱は一对となって立てられる場合が多い。T村の大工によれば、2本の柱は必ず主寝室にあり、東側の壁の中央に男の柱、西側の壁の中央に女の柱が立てられている。

3.2.2 祭壇

調査対象住居には主に3種類の祭壇が存在した。それぞれ土地の神が祀られているチャオ・ティー (cao tii)、仏教の神が祀られているヒン・プラ (hin pra)、家の神が祀られているS村：テワダー (thevadaa) / T村：ヒン・テワダー・バーン (hin thevadaa baan) と呼ばれている。また上記以外にタオ・タンシー (tao tang sii) と呼ばれる祭壇が屋敷内にある住居もあった。この祭壇は新築や改築祝いの際に設置し、供え物をする。

3.2.3 方位観

タイでは独自の方位観が存在し、その方位観は間取りの構成、祭壇の位置、就寝形態などに大きく関わってくる。調査対象地では東・南が良い方角とされている。一方、西・北は商売がうまくいかないとされている。

4. 女性の社会的役割

4.1 土地の所有権

母系的側面が強いタイでは末子相続という風習があり、住居と土地が一番下の娘が相続する。末娘の夫となる男性は、結婚相手の家族から娘をもらう代わりに婿入りし、義理の両親の面倒をみるために同居をする。現在は職業の多様化により村を離れる若者が増えたため、末娘が家と土地を相続し両親の面倒をみるという考え方は薄れつつある。インタビュー調査で家と土地の所有者を聞いた

ところ、S村では8軒中3軒が女性、T村では10軒中8軒が女性という結果だった。これは、今もなお末子相続の風習が残っていることを示唆する。

4.2 ブライドウェルス：婚資

ブライドウェルスとは、結婚する際に新郎側が新婦側に娘をもらう代わりに支払う代価のことを指す。T村ではカー・サイ・ピーとカー・シンソートと呼ばれる二種類のブライドウェルスがある。カー・サイ・ピーとは、カー＝値段、サイ＝入れる、ピー＝霊という意味で新婦側の先祖の霊に娘をもらうことの許しを請うために支払う代価である。カー・シンソートとは、カー＝値段、シンソート＝持参金という意味で新婦側の家族に許しを請うために支払う代価である。以前はカー・サイ・ピーだけを支払っていたが、現在はカー・シンソートのみ、またはカー・サイ・ピーとカー・シンソートの両方を支払う。よく似た言葉でカー・シア・ピーというものがあり、カー＝値段、シア＝終わらせる、ピー＝霊という意味である。以前は男性と女性が結婚前に一緒にいることが許されなかったため、結婚前に男性が女性に触れてしまった場合に罰金として支払う代価のことである。

4.3 長女が受け継ぐ祭壇

屋敷の一角には、一族の長女が受け継ぐ祭壇がある。この祭壇は、一族の先祖の霊が祀られており代々長女が受け継いでいく。祠の中には先祖の霊が横になれるよう

布団と枕が置かれ、祭壇の前に供え物がしてある。調査では、S村のNo.8の住居にこの祭壇があることを確認した。

5. 男女の空間利用の分析

5.1 就寝形態

就寝形態には、頭の向きと男女の並び方について全世界帯に共通するルールがある。

S村では寝室には3.2.1で述べた重要な柱があり、寝室が2つある場合は重要な柱がある寝室が年長者のものである。頭の向きについては東側か南側に向けるのが良いとされ、インタビュー調査によって就寝形態がわかった23人のうち10人が東側、残りの13人が南側に頭を向けていた。男女の並び方については、住居No.1、No.2、No.5、No.6、No.7、No.8の夫婦6組のうち1組を除く5組の夫婦は男性が右側、女性が左側で並んでいた。これは男性＝右、女性＝左という考え方があるからである。

T村では最も東側にある寝室をナイ・ファン・ルアンと呼び、年長者の寝室となる。また重要な柱は、ナイ・ファン・ルアンに必ずある。頭の向きについてはS村と同様に東側か南側に向けるのが良いとされ、インタビュー調査によって就寝形態がわかった26人のうち21人が東側、2人が南側、残り2人が西側に頭を向けていた。西側に頭を向けていたNo.9の妻と子どもは、隣の部屋で寝ている夫に足の裏を向けられないために西側に頭を向けていること



図3 T村の寝室の配置、就寝形態

がわかった。男女の並び方については、住居番号No.6、No.9、No.10の夫婦3組のうちNo.10の夫婦は男性が右側、女性が左側で並んでいた。これはS村と同様に男性=右、女性=左という考え方があるからである。No.6の若い夫婦の寝室は中に入ることができず、詳しい並び方については聞き取ることができなかった。No.9の夫婦はT村には住んでおらず、並び方を聞き取ることができなかった。

このように就寝形態は柱の位置、年齢、方位観、右と左の要素によって決まっていることがわかる。

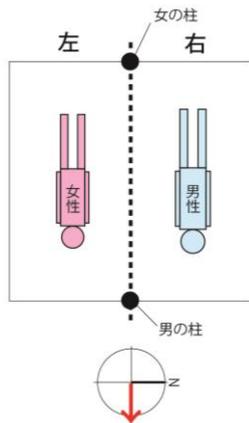


図4 就寝形態

5.2 結婚式・宗教儀礼

T村において100年ほど前の伝統的な結婚式は、双方で決めた金額のカー・サイ・ピーを新婦の両親へ支払い、供え物を渡す。次に新郎の手首に白い糸を巻く儀礼を行い、最後に皆で食事をして結婚式が終わる。結婚式後の7日間は、新郎が新婦側の家に夜だけ通い互いの相性を確かめる期間となっている。この期間中であれば、離婚という形にはなるが別れることができる。無事にこの7日間を乗り越え正式に夫婦になると、エオ・ハーブという行事を行う。エオ・ハーブとは新婦を新郎側の親戚に紹介する行事で、新婦が布や食べ物などが入った天秤棒を担ぎ、新郎側の親戚の家を一軒一軒まわるものである。現在の結婚式はカー・シンソートを新婦側に支払い、新婦側の親戚が新郎の手首に、新郎側の親戚が新婦の手首に白い糸を巻く。次に新婦が新郎側の親戚に、新郎が新婦側の親戚に“コーカマー”と呼ばれる尊敬の念を表す儀礼をそれぞれ行い、最後に皆で食事をして結婚式が終わる。エオ・ハーブは車の普及などの理由により、現在は行われていない。

新郎新婦、その親族の座る配置については新郎が右側、新婦が左側に座る。これは就寝形態と同様に、男性=右、女性=左という考え方があるからである。

僧侶を住居内に招き行う宗教儀礼は、基本的に広間空間で行う。ヒン・プラが配置されている場所が空間的に最も上位で僧侶、男性、女性の順で座る。これは女性が僧侶に接触してはいけないという仏教の教えが関係している。

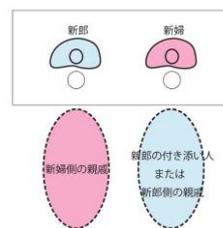


図5 結婚式での配置

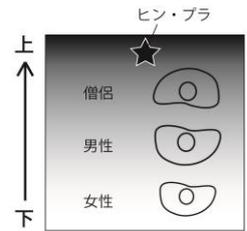


図6 宗教儀礼での配置

6. おわりに

今回の調査で、男女で空間の使い方に違いがあることがわかった。結婚式・宗教儀礼の配置などから、男性は公的な場で権力をもっている。これは男性のみが僧侶になることができるという仏教の教えが関係している。信仰に熱心なタイでは、男性は生まれながらにして大切な存在といえる。インタビュー調査の中でタイでは洗濯物を干す時に、男性の服より上に女性の服を干してはいけない、特に男性の上半身に着るもの（上着やTシャツ）より上に、女性の下半身に着るもの（スカートやパンツ）を干してはいけないという回答があった。またタイでは足の裏は不浄なもので、目上の人に足の裏を向けてはいけないという考え方がある。反対に足の裏から一番離れた頭は大事な部分であり、僧侶になることができる男性の頭は最も大切な部分とされている。

公的な行事で男性が権力をもつ一方で、住居と土地が末娘に相続される末子相続や結婚の際に新郎側から花嫁側へ支払われるブライドウェルスなど、タイの女性はそれに値するだけの価値をもっているといえる。女性がいなければ一族を引き継いでいけないのである。タイでは男性は屋敷外部の社会で活躍し、女性は世帯や住居を守るという社会的役割をそれぞれ担っており、双方がいなければタイの社会は成り立たない。そうした補完的な社会的役割を、住居の2本の柱が象徴しているのではないだろうか。

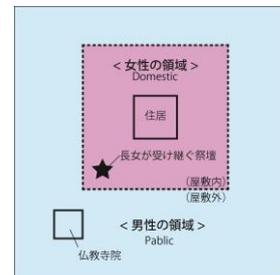


図7 社会的役割と空間概念

参考文献

- 1) 米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社,1995年
- 2) 関啓子 木本喜美子編『ジェンダーから世界を読む』明石書店,1996年
- 3) 清水郁郎『家屋とひとの民族誌』風響社,2005年
- 4) 宮川祐未『ラオスKL村における男女の空間の使い分けについて—女性の活動から見た住居空間の様態—』2011年度芝浦工業大学工学部建築工学科卒業論文,2011年